「この天秤を越えていく為の何らかの方策」

［登場人物］

男１　１９歳、大学２年。女２の弟。
男２　２１歳、専門学校生。

女１　２１歳　社会人。
女２　２０歳、大学３年。男１の姉。
女３　２１歳、社会人。
女４　２０歳、大学３年。

第一幕

大学構内の小会議室。
１８畳ほどの部屋で、上手に扉があり、廊下、外へとつながっている。扉のそばに照明のスイッチ。下手奥に倉庫につながる扉がある。
部屋の中には木製の長机が六つ並べられている。周辺にパイプ椅子が３つ置かれている。
上手の壁面に黒板があり、マグネットやプリントなどが乱雑に貼り付けられている。
床面はリノリウム張りだが、ペンキやしみなどで汚れている。また、あちこちに新聞紙や脚立、棚、時計、雑誌などが散乱している。
壁面上手側にエアコン、中央に窓。壁のあちこちにポスターや張り紙などがあり、破れかかっているものもある。

男１、両手に中身の詰まったビニール袋をぶら下げ、さらに大きな箱を２つほど抱え込むようにして下手から登場。

男１、上手の扉の前まで来て

男１「早く来てって、こっち、両手使えないんだから」
女２（声のみ）「待って、車に忘れ物したかも、ごめん、待ってて」
男１「ちょっと嘘、一旦置くよもう。いいでしょ別に」
女２（声のみ）「駄目だって、大事なもの入ってんだから」
男１「いいじゃん別に、箱入ってるんだし、ゆっくり置くから」
女２（声のみ）「駄目、壊れたらほんとやばいんだから」
男１「もう限界、腕ちぎれる」
女２（声のみ）「あーもう、根性なし」

女２、上手から小さめの段ボールを抱えながら登場。

女２「ったくもぅ、男だろ。こっちだってしんどいんだからさ」

女２、段ボールを床に置いてポケットから鍵を取り出す。

男１「ちょい待って、そっちはいいのか」
女２「どうせこっちは飾りとかだけだし。重要なのは全部そっち」
男１「おい」

女２、鍵を開けて部屋の中に入り、電気をつける。

女２「うっわ、相変わらずひどいなこの部屋は。実際会議してるとことかみたことないしな」
男１「あぁ、もう限界」

男１、続けて部屋の中に入る。抱えている荷物を乱暴に投げ出すように床に置く。

女２「お前雑。壊れたら責任とれんの？」
男１「自分もしてたじゃん。ていうかこんなにいらないでしょ、飲み物。来るの何人？」
女２「かるた同好会の面子をなめちゃいけない。試合後の打ち上げでは全員が２リットルペットボトル片手に会話してたんだから」
男１「そうですか、すごいですね」

女２、エアコンのスイッチを入れる。

女２「暑い。ほんと、車からここまでの距離が暑い」
男１「わかる。てか、そもそもなんでここでやるの？普通居酒屋とかホテルでしょ、同窓会やるのって」
女２「居酒屋だと持ち込みできないし、他の客に気兼ねするじゃん？ホテルはこんな人数じゃあれだし。別に誰かの家でもよかったんだ

けど、やっぱ騒ぐとね。家族とかもいるだろうしさ」
男１「いや、ここだってだれか来たらどうするのよ。学生会館て」
女２「断言する、誰も来ない。私この学校に入ってからでここに人が来てたのをみたことない」
男１「まあ、そもそもこっちのキャンパスはこの時期人少ないけどさ・・・それにしても汚れすぎだな」
女２「まあ、歴史の重みというか。色々作業してたんだろうね、色々な団体が。今じゃ誰も寄り付かなくなってるけど」
男１「で、もう運ぶのこれだけ？」
女２「多分。あと軽いものは持ってきてもらうし。じゃあ、ちょっと車動かしてくるね」
男１「最初からそうしといてくださいよ」
女２「文句多いな。バイト代やっただろ、今日一日分」
男１「そんな偉そうに言える額じゃなかったと思うんですけど」
女２「ついでにタダ飲みできるじゃん」
男１「俺まだ駄目だし。だから運転手させたんだろ」
女２「ああ、そっか。あとまあタダ飯もついてくるぞ（言いながら下手扉へ移動）」
男１「自分が汗水流して運んだ飯で、しかもつまみみたいなもんばっかりね」

女２、上手に退場。やや、間。

男１、床においた袋から中身を取り出し、机の上に並べ始める。お菓子の袋やペットボトル、缶など。
次に箱を開け、中に入っていた賞状や盾をならべていく。最後に大きな箱をあけたところで、動きが止まる。やがて、ゆっくり中身を取り出し、一部が壊れたトロフィーと欠けた部品を両手に持つ。なおそうとするが、上手くいかない。
女２、上手より登場。

女２「ただいま。駐車場遠いよね」

男１、上手の扉を抑えて

男１「ちょっと待って、今駄目」
女２「はぁ、何が？」
男１「とりあえず駄目」
女２「いや、わけわからんし」
男１「ちょっとどっかいってて、虫いるから」
女２「虫？どんなの？」
男１「なんかわかんない、すごいの」
女２「・・いいよ別に、それより暑いし。潰してやる、虫くらい」
男１「なんで。いいから、ちょっと待ってって」
女２「暑いってー」
男１「あ、あと、着替えてるから、今俺！」
女２「はあ、なんで今？ていうか着替えって何？持ってたの」
男１「うん、サプライズで」
女２「さっさとして。３０秒で」
男１「わかった」

男１、トロフィーを再び箱にしまい、抱えこんで下手の倉庫に入る。

女２「あれ、着替えは？」
男１「やめた。やっぱ、いいやって」
女２「はあ。虫は？」
男１「潰して捨てたけど。見たい？」
女２「いや別に」

女２、机の上を見回す。

女２「え、こんだけだっけ」
男１「何が」
女２「持ってきたの。後藤先生のとこから」
男１「じゃなかったかな」
女２「いやいやいや、あれでしょ。でかいやつないじゃん一番」
男１「え、何それ」
女２「いやお前抱えてたろ。あの大きな、金色のでかいコップのやつ」
男１「あ、トロフィーね」
女２「そうそう、どこやった？なかった？」
男１「あ、あれね。トロフィーね、あの箱。わかんなかったから。なんか、そっちの倉庫に置いちゃった」
女２「なんでわざわざ」
男１「いや、邪魔かなと思って」
女２「主役だろうが。もう、めんどくさい、とってくるわ。どこ？」
男１「あ、いや、とってくるよ。飾り付けておいて。わからないから、レイアウトとか」

男１、下手に退場。女２、箱に入っている色紙のチェーンで机に飾り付けをはじめる。やがて、男１が下手から慎重にトロフィーを運んでくる。

女２「それ、そこね」
男１「はいはい」
女２「ちょっとは気合入れてやれよ」
男１「やけに頑張るね、こういうのになると」
女２「久しぶりだしね、集まるの」
男１「え、いや、成人式は。あったじゃんやけに張り切って着物レンタルして」
女２「んーまあでも、身内だけじゃないからさ、あれは」

男１「ああ、そうか」
女２「それはそれで面白かったけどね、卒業以来でクラスの人間色々変わってて」
男１「変わってた？」
女２「いや、変わってないの。全然変わってないんだけど、中身は。昨日もいたっけ？くらいの勢いで。でもまあ、やっぱ進路はちがうからさ。不思議っていうか、新鮮なわけだ。お前が社会人ですか、みたいな」
男１「あー。それは、まあ、そうか」
女２「思わない？働いてる奴だっているでしょ、そっちだって、もう」
男１「まあ、最近あんま会ってないし。忙しいじゃんやっぱり。それだと」
女２「うん、一緒。だからさ、成人式行った時でもさ。オールできない連中がいてて。明日仕事だと、やっぱり」
男１「なるほど」
女２「同じくせして、違和感でしょ、やっぱそこは。昨日と同じ顔してるくせしてさぁ」
男１「向こうのほうがえらいんじゃん。自主休講だらけの学生ニートさんより」
女２「うっさいな。なんでもいいけどさ。ともかくだから、変わってないし、変わらないんだけど、無理やり変えられてっちゃうからさ。時間が経つと。だから、とりあえず少なくとも、この身内の集まりだけは、一回今のうちにやってやろうって。絶対」
男１「まあ、よくやる気なったねとは思うよ。すぐに」
女２「うちの場合は、最後の時にさ。飲めるようになったら、一度集まろうって言ってたから。やっぱ、あのメンバーで、ぱーっとしてみたかったし」

女２、一通り飾り付けが終わったところで

女２「んー、なんか駄目だな。締まりがない。やっぱこれ、主役級を持ってこようか、こっち中央に」

女２がトロフィーに手をかけようとする。

男１「あ、ごめん。それやるから、椅子だしてくれるかな。結構重いし、これ」

女２「椅子？ていうか机は？」
男１「それも移動させとくから」

女２、下手に退場。男１、慎重な手つきでトロフィーを手にする。

女２「あ、ねえ」
男１「はい何でしょう」
女２「いや、椅子いくついるの？」
男１「知らない。多分２，３０くらい？」
女２「あほか」
男１「いや、多めで。余裕見て。お願い」
女２「なんか椅子山積みなってて怖いんだけど」

女２、下手に退場。男１、トロフィーを中央の机に移動させようとする。女３、上手から登場。扉を開けて入ってくる。運んでる途中の男１と目があって

男１「あー・・えっと」
女３「あ、はい」
男１「すいません、今すごく集中してるんで。静かにしといてもらえますか。むしろ、出て行ってもらえますか」
女３「えっと、あの、でもここ」
男１「お願いです。お願いします」
女３「あ、はい」

女２、下手から椅子を持ちながら出てきて

女２「お、来た」
女３「あー」
女２「変わんないねー」
女３「そりゃそうだろ、卒業してからすぐじゃん」
女２「いやでも、一応は数年ぶりでしょ？なんていうか、昨日まで話してたっけ？みたいな感じ」
女３「わかるわー。もうね、全然違和感ないもん今」
女２「だよね。卒業式以来なのにね」
女３「もう３年か、一瞬だねほんと。仕事してると月日たつのほんと早いからね」
女２「そうなんだ」
女３「基本同じことの繰り返しだからね。そっちは学生楽しそうだな」
女２「そうでもないよ、色々」
女３「まあ、ゆっくり話そう、そこら辺は、今日はさ。まだ？他の面子は（男１をやや気にしながら）」
男１「あー」
女２「あ、これ、うちの弟で。荷物持ちとか、今日は色々」
女３「あぁ、そうかそうか。どうも、女３です」
男１「あ、すいませんでした、えっと」
女３「あぁ、いえいえ。ごめんね邪魔しちゃってさっきは」
男１「あ、いえいえ」
女２「なんかしたのこいつ」
男１「いや、えっとね」

女１、上手より登場。

女１「おっすー」
女２「お、会長！」

女１「よぅ、元気？」
女３「久しぶり、変わんないね」
女１「んー、かねぇ？」
女２「まあ、皆そんなもんなんだろうけど、って今話してて」
女１「あぁ」
女３「いや、男２はあいつどうだろうな。ものすごく硬くなってるんじゃないか、案外」
女１「（男１を見て）いや、随分変わってない？背伸びた？今更」
男１「あ、はい、え？」

やや、間

女１「（男１を指して）え、あれ？違う？」
女２「違うよ」
女３「会長ボケすぎ」
女２「これ、うちの弟。運転手兼荷物運びみたいな、今日は」
女１「あぁ、そうかそうか。ごめんね」
男１「あ、どうも、すいません。なんか、似てますか？」
女３「全然」
女２「さすがにあいつが弟だと嫌だわー」
女３「ありえねぇ」
男１「なんだろうこれ、嬉しいのか悲しいのか」
女３「会長のキャラはやっぱ、変わってないね」
女１「そうかな」
女２「間違いないわ」
男１「会長って呼んでるんですね」

女３「なんか、会長っていうと偉そうに聞こえるよねってことで」
女２「同好会会長だけどね」

女１、トロフィーに近づいて眺めながら

女１「おーおー。懐かしいな、これも。一年かぎりの同好会でやってやったーって感じでしょ」
女２「ほんとにね」
女３「懐かしいわー」
男１「皆さんにとって、大事なものなんですね」
女１「そりゃもうね」
男１「ですよね」
女３「なんかね、やっぱ働きに出たらこうして学生時代の思い出って貴重に思えるもんだよ」
男１「ですかね・・・あーえっと、」

男２と女４、上手より登場。中に入る。

男２「こんにちはー」
女４「あ、もう皆いるんだ。久しぶり」
女３「お、来た」
女２「あれ一緒に来たの？」
男２「いやたまたま。そこの、入り口で会って」

女３「なあなあ、今ちょっと、そこ並んでみて（と、男１と男２を並ばせる）」
男２「はぁ？」

女４「すごい、飾り付けしたんだ。これ、どうしてたの？賞状とか盾とかは」
女２「後藤先生が持ってた」

男１「あぁ」
男２「いや何？いきなり」
女３「いいから。いやぁ、ないわぁ。会長、見てみ？どう？」
女１「あはは。まあ、とりあえず、飲もうか。な」
男２「なにこの、来ていきなり笑われるっていうこの状況」
男１「すいません」
男２「ああ、いや、えっと」
男１「あの、弟です、女２の。なんか、手伝いみたいで、今日」
男２「ああ、まじかぁ。ご苦労様」

女４「え、家で？全部？」
女２「うん。なんか、ずっと保管してくれてたんだって。忘れてた」
女４「そういえばまあ、色々やってくれてたねえ。練習場所とか、大会エントリーとかも」
女２「なんか、昔と変わんない感じだったけどね」
女４「あ、今日来れないの？」
女２「ううん、来るはずだけど」
女４「そっか、でもこの学校すごいね、ここ来るまで誰もいないし。こんなガラガラなんだ」
女２「夏休み中だしね。まあ普段でも誰も居ないんだけど、こんなとこ」
女３「同好会の練習も余裕でできるね」
女２「え、まだ続けてるの？競技かるた」
女３「ま、もう全然趣味のレベルだけどね」

男２「で、くるのこれだけ？」
女３「一応同好会メンバーは全員でしょ？後藤さんは？」
女２「あ、なんか、遅れるって、用事で。ここらへん取りに家に行ったんだけど」
女４「懐かしいな、先生。元気だった？」
女２「なんか、わかんない。相変わらず、ぬぼーってしてた」
男２「それはまあ、元気なんだろうな、あの人的には」
女１「どうしよう、待っとく？全員一応揃うまで」
女４「どれくらい遅れそうって？」

女２「なんか、はっきりしなかった。用事あるんだかないんだか、終わり次第、とかいってたけど」
女４「あぁ、なんか、変わってないぽいね。その感じ」
女３「とりあえずもう始めようよー」
男２「そうね。後藤待ちながら飲んどくか」
女１「あはは。というわけで、とりあえず、飲もう。な」

暗転。

第二幕

数十分後、同じく小会議室。周囲には空き缶や空き箱、箸などが散乱している。長机やパイプ椅子なども、乱雑に部屋の隅におしやられている。
全員、部屋の中央で床面に座り、その中心で女２と女３が向い合っている。やや、間。

女４「引っ張るねぇ」
男２「さあ決めた？」
女１「いっちゃえ、どーんと」
女３「こっち！」
と言いながら片方のトランプをめくり、その後
女３「っしゃあ」
女２「うそー」

女2、落ち込む。周囲、騒ぎ立てる。

女2「まじかぁ。やられたー」
女3「もうね、右来るって思ったもんね、絶対」
女2「くそー」
女4「しかも女3のハンドスピードがめっちゃやばい」
女3「必死だもんそりゃ」
男1「さすがにかるた同好会なんですね」
女3「まだまだいけるかなぁ？」
男2「じゃあ、最下位の女2さんにはシンプルにものまねいってみてもらいましょうか」

周囲、騒ぎ立てる。女2、ものまねをする。

男2「うわぁ」
女2「え、ごめん」
女1「まあ、頑張ったよ」
男1「見てるこっちが恥ずかしいよ」
女4「だねえ」
女2「もういい、もういいもん。知らないもんもう」
女3「はい、じゃあ微妙な個人芸が終了したところで、次は名言集の時間です」

女3、かばんから原稿用紙を取り出す。男1以外の周囲、騒ぎ立てる。

男1「何ですか、それ？」

女２「この同好会の長い歴史ではね、時々名言が生まれるわけよ」

男２「わけわからんやつ多いからな」
男１「あぁ、はい」

女３「長いって、一年もないじゃん」
女２「それでもこれだけ生まれるってやばいよね」

女３「はい、行くよ。最初ね。男２『俺思うんだけどさ、かるたで食っていけないなら、かるたを食っていけばいいんだよ』」
女１「あはは、あったあった」
男２「それなりに真剣だったんだよ」
女３「いや、真剣な空気の中でこれだからね、だから名言なんじゃん」
女２「真面目に女４が進路の話してた時だからね」
男１「ああ、そうなんだ」
女３「深刻な空気の中で、男２がなんか、血迷った」
女４「わけわかんなかったしね、言われた方も」
男２「いやだから、なんかわかるじゃん。伝えたかったことは」

※　このシーンについて。集団の中で適当な名言があれば、それを追加しても良い。その場合は、読み上げる者、騒ぎ立てる周囲、反応する当人、男１に状況を説明する者、男１の感想の順でセリフをそれぞれ追加する。
終了したら、以下のやり取りに進む。

女１「あはは。とりあえず、飲もう。な」
男１「あれは、名言じゃないんですか？」
女２「なんていうか、乱発しすぎてね」
女３「しょっちゅう言ってたからね」
男１「高校生で？」

男２「ペットボトル片手にな」
男１「あぁ、」
女３「あーこれ、なんだっけ。女４『お前の動きは骨まで愛が染み渡ってないんだよ』」

男２「意味わかんねえよ！」
女３「なんだっけ、練習中？」

女４「え、そんなの言った？」
女１「あったねえ」

女２「これねー、別にかるたの動きとか関係ないからね」
男１「え、そうなの？」
女４「あーあれか。ダンスした時か」
女２「そうそう」
男１「ダンスしたんですか。かるた同好会なのに」
女２「したした」
女３「なんか、したねぇ。文化祭で、パフォーマンス」
男２「割とマジでしんどかったからな」
女４「誰だあんなの言い出したのは」
女３「まあ、いい思い出だね」
女１「ちょっと、今やってみてよ、見たい」
女２「はぁ？無理でしょ。覚えてないって」
女３「いけるいける。ウチラもやるから」
女４「おーやるか。覚えてるかな」
男２「体が覚えてくれてるって」
女２「セクハラくさいなお前の発言」
女３「（携帯端末を操作して）お、あった」

女３、端末から音楽を流す。曲に合わせて踊る男２女２・３・４。その動きはかなり危なっかしい。曲の途中で、男２の腕がトロフィーにあたり、壊れていた部分がとれてしまう。全員静まり返る。

女３「うわ」
男２「え、何、え」
女１「あー・・・」

やや、間。やがて、男１が口を開こうとした瞬間

女４「ごめん」

全員、女４に注目する。

女４「それ、違うの、男２じゃなくて。自分なんだ」

やや、間。

男２「え、は？」
女２「え、だって、これ持ってきたのうちらだしさ」
女４「じゃなくて、昔。やっちゃったんだ、大会後にさ。誰も居ない時に」
男２「あー・・・」
女３「まじかぁ」
男１「ずっと誰も気付かなかったってことですか」
女２「後藤先生保管してたのに・・・」
女３「まあ、壊しちゃって、言いづらいのはわかるけどさ。隠しとくってのはどうよ」

女１「ずっとそのままってのは、ちょっとね」
男２「俺まじで結構あせったからね」
女４「違うんですよそれが。それね、壊したの、わざと。むかついてさ」

やや、間。

女４「あーもう回ってるかな。いいや、もうなんか、言うね。皆も知ってるけどさ、そのトロフィーの大会の時、しんどかったじゃん、自分。家の中ぐちゃぐちゃで、進路もきびしいっぽくって、なのに同好会してたしさ」
女２「あぁ」
女４「でさ。勿論、はっきりいって、私下手だったから。戦力外でしょ。でも、団体戦は５人いないといけないから、エントリーして。練習もして。入試直前だったんだけど。試合出て、全部負けて。そのトロフィーは、その結果でも、あるわけじゃん」
女３「それはさ」
女４「わかってるよ、だから悪いとか思ってないよ。だからもう言えるんじゃんこうして」
女２「うん、そっか」
女４「それで、だから、トロフィー受け取ったけど、皆、全員でとった勝利だって、盛り上がってて。そりゃそうなんだけど、その『皆』の中に自分は入ってるのかって。でも、水さすわけにもいかないし、そりゃ喜んでたけどさ。なんかやっぱり、一人で観てたら、こいつは青春の象徴みたいにみんないうけど、その中に、そんな気持ちでいられない奴もいるんだぞって言いたかったっていうか」

やや、間。

女４「だから、なんか皆で盛り上がって青春だったかもだけど、全部が全部、良かったわけじゃなくてさ。嫌なこともやっぱり、ありました。はい、おしまい。以上」
女２「あのね、」
男２「いやそりゃさ、当時だって、色々あったよ、そりゃ。俺だって」
女３「嘘だぁ」

男２「いや、今になればくだらないけど。やっぱ、女子ばっかでしょ。しかも同好会でしょ。おかしいじゃん、普通に考えて」
女２「あー」
男１「まあ、それは、ねえ」
男２「俺は皆知ってるけど、唯一経験者だったからさ。挫折したけど。だから、やるのが怖くて。でも、あきらめられなくて。だから、正直同好会って話を聞いた時に、まあ、うれしかったんですよ、やっぱ。まあでも、うれしい反面ね、やっぱり、挫折感もあってさ。何してんだろって思ったりもしたよ、そりゃ。でもまあ、一応ね、やっぱ、後悔はしてないというか、うん。色々あるけど、やってよかった。そう思う。色々言われたけどね、ほかの、昔一緒に競技めざしてた頃のメンバーとかには」

やや、間。女１は一人、眠そうにしている。

女３「まあでも、いいんじゃない？今振り返ってみれば、色々あるけど、一生懸命だったってことでしょ皆。それなりにさ」
男１「あぁ、」
女３「やっぱうらやましいもん、聞いてると。しんどいことも、くやしかったこととかも全部含めて。シンプルじゃん、全部。今さ、仕事してるとね、全然ないからね、そういうの、ほんと。繰り返しだけでさ、終わりもないし、ずっと。誰にもね、怒られたり笑われたりしないで、なんか、ぼんやりしてる。ずっと。毎日。周囲も、自分も」
女４「そんな、なんだ」
女３「うん。だからさ、ほんと、学生のうちだよ。良くも悪くも、はっきりしてるのってさ。言ってもらったりすること、ないでしょ。勝ちも負けも。でも、視線ていうか空気は確実にあってさ。全部察しなくちゃいけなくてさ、全然知らないよそんなのっていう。わかんないでしょ。どんだけ不安か。全部ひとりで抱え込むって。だから、やっぱ、うらやましい」

やや、間

女２「（挙手して）言っていい？この流れで」
男２「おう、言え言え」
女２「なんかさ、でも、うちだってそんないいもんじゃないよ今。そりゃ働かなくていいっていうのはあるけどさ、その、しんどさもわ

からないんだけどさ。でも私だって別に楽じゃないし、学校だってシンプルでもないし案外。話す人とかいなくて、一日中全部、なんとなくすごしてきてて。何もなくて。不満もないけど、だから不満っていうか。気づいたらもう、こんな二十一とかなってて さ。もう今更。ほんと、何も無い。ほんとに」

男２「まあ、お前、変なとこ真面目だしな」

女２「とは自分でも思うよ。でも、だからさ。この同好会で、誘われて入った活動だったけど、それでも、この面子で、過ごしてきたのはね。やっぱりそれなりに楽しかったっていうか、疲れる以外の場所がね、あったんですよ私的には。あの時は。だから、その、わかるんだけど。女４にはほんとごめんなんだけど。でも、それでも私としては、救われたの。ここがあったことで。だから、ごめん、なんていうんだろう、わかんないや。でも、ほんとに、そう思うの」

やや、間

男２「まあ、あたりまえのことなんだけど、誰だって、いつだって、嫌なこともいいこともあるんだよな、どっちかだけじゃなくて。忘れがちだけど」

男１「自分一人で不幸にはならないでほしいですよね。誰だって、割と大変なんでね、生きてくの。僕だって」

女３「お、少し成長したふりか？」

男１「で、いいですよ別に」

男２「まあだからってその、何の解決にもならないんだけどな。何もできないんだけど。力になれることとかなくて、申し訳ないんだが」

女３「別にお前にそれは期待してないだろ」

男２「あ、はい、そうですか」

女２「そうやって慰めるパターンで付き合いだすとかねらってるんでしょ」

男２「この面子でそんなことするか」

女３「彼女まだできてないんだろ」

男２「関係ないし、それは。いいでしょ別に」

女２「まあとりあえず、でもさ。いい？」

女４「うん」

女２「何もできないんだけど、ていうか何もしてもらいたくないんだけど、ひょっとしたら。それはもうやっぱり皆、それぞれ、違っちゃってるから。それにすがるってかっこ悪すぎるから、多分」
女４「うん・・・うん」
女２「でも、それでも、こうやってなんとか集まってさ。一人ずつは変わってない皆がいてさ。昔も今も、色んなことをそれぞれ抱えて。ようやく、そんな当たり前のことに気づけるっていうか、なんか、それで嬉しい、今」

やや間

男２「まあ、いいんじゃない？それで十分だって。俺は、そう思う」
女３「なあ」
男２「うん」
女３「なんでお前がちょっといい話風にまとめてんだよ」
男２「え、駄目？」
女４「おっさんだからそういうの」
男２「え、まじで」
女２「間違いないな」
女４「昔からそうだろ」
女１「まあそういうとこあったからね、昔から、男２」
男２「もうなんでもいいよ」

男２、袋にある飲み物を取りに行く。

女３「あーなんか語ったら喉乾いた。おいもうこれないじゃん（空になったボトルを持ちあげて）」
男１「あ、すいません」
男２「（別の缶を持ちながら）まだこっちならあるぞ」

女３「そんなの数に入るか」
男２「ああそうですか」
女２「じゃあ、買い出し行く？ちょっと遠いけど、コンビニ」
女３「ほらいってこいよ、男２。説教代だ」
男２「なんだそりゃ」
女３「下手なまとめ聞いてやっただろ」
男２「ていうか車乗れないし、俺」
女３「ほんと使えねえな、じゃあせめておごれよ、全員分アイス」
女１「お、いいね」
女２「なんか、食べたかったしね」

――

男２「ちょ、マジでか」

女３「自転車とかある？」
女２「いいよ、うちの車使って。運転手も。ほら（男１を促す）」
男１「え、今から？もう色々しんどいんだけど」
女２「運転手は家に帰るまでが運転手でしょ」
男１「意味わかんないよ、ていうか帰れんのかな今日」
女２「バイト代分きっちり働け」
男１「絶対普通のバイトしてたほうが良かったよね、これ」

男１、上手に歩き出す。男２、女３、男１のあとについていく

男２「え、なんで来るの？」（上手に退場しながら）
女３「自分で選びたいじゃん味。飲み物も」（上手に退場しながら）

女４、トロフィーを見つめる。

女４「自分一人で不幸になるなってなぁ」

やや、間。

女４、携帯電話を取り出して座り込む。

イヤホンを着け、一人で歌い始める。（長渕剛　『マイセルフ』）

歌っている途中で、女１が女４の頭を叩く。

女４「わ。あ、ごめんなさい。うるさかった？」

女１「あはは。とりあえず、飲もう。な」

女４「・・・そうですね。とりあえず、続けましょうか。もう少し、今は」

暗転。

完